僕のミステリーの最高到達点です。

エリート銀行員の仁藤俊実が、
「蔵書を置く場所に困った」という理由で
妻子を殺害、逮捕・拘留された安治川事件。
犯人の仁藤は世間を騒がせ、
ワイドショーでも連日報道された。
この事件に興味をもった小説家の「私」は、
ノンフィクションとしてまとめるべく
関係者の取材を始める。
周辺の人物は一様に「仁藤はいい人」と語るが、
一方で冷酷な一面もあるようだ。
さらに、仁藤の元同僚、大学の同級生らが
不審な死を遂げていることが判明し……。
仁藤は本当に殺人を犯しているのか、
そしてその理由とは?!

怖い話 好きですか?
驚く話 好きですか?
ぜひ、これをどうぞ
貫井徳郎

PROFILE 貫井 徳郎（ぬくい とくろう）
1968年東京生まれ。早稲田大学商学部卒業。1993年、鮎川哲也賞に応募した『慟哭』で衝撃的なデビューを果たす。2010年、『乱反射』で第63回日本推理作家協会賞、『後悔と真実の色』で第23回山本周五郎賞を受賞する。著書に『失踪症候群』『迷宮遡行』『空白の叫び』『ミハスの落日』『夜想』『明日の空』『灰色の虹』『新月譚』ほか多数。

読み終わった瞬間、むむ、これは一体どういうことだ!? と思ったが、
すぐに、いやこれはこれだから傑作なのだ、と確信した。
読後に残るこの感覚こそが、貫井さんがやりたかったことなのだ。
これは貫井さんによる前衛的な傑作だ。
啓文社コア福山西店　三島政幸さん

情無用の犯罪小説家・貫井徳郎が辿り着いたミステリーの最極北!
有隣堂アトレ恵比寿店　梅原潤一さん

本当は誰も正確に他人の事を語れるわけがない。
じゃあ、ノンフィクションってなんなんだ。第三者によって語られている限り、
そこに真実があるのかなんて確かめようがないし、わからない。
『微笑む人』は非常に面白い。ラストに至るまでの道のりは最高に面白い。ぐんぐん読ませる。
いきもつかせぬ面白さ。最後にあなたは何を思う……
匿名書店員さん

真実をもとめてページを捲っていたはずなのに……。
ページを捲っていくごとに世界が歪んでいく。
なのに、やめられないのはなぜだろう?
読み終わったあと、足元がグラグラするような不安感にしばらく囚われてしまった。
紀伊國屋書店横浜店　川俣めぐみさん

「小説は事実よりも奇なり」!
既存のミステリとノンフィクションの形式をうまく融合させた、極上の一作です。
あおい書店博多本店　柴田正人さん

コワイ! でもやめられない!

書店員さんからの驚嘆の声、ゾクゾク!!

「これは小説（フィクション）」と、時々自分に言い聞かせながら読みました。
殺人犯として逮捕された仁藤俊実は本当に妻子を殺したのか?
自分のものさしでしか、物事をはかることができないため、次第に見えてくるのは仁藤ではなく、
仁藤という鏡に映る自分の姿のような気さえしてきました。
「あなたは、これをどう読む?」と作者に問われているようです。
明林堂書店ゆめタウン別府店　後藤良子さん

冒頭から引き込まれて、何かに取り憑かれたかのように一気読みしました。
正直、このラストには、「やられた!」。
思いっきり読み手の心理の裏を行く、ある意味で他のミステリの追随を決して許さない作品。
啓文堂書店三鷹店　西ヶ谷由佳さん

「人間の心の動き」がノンフィクションなフィクションのインパクトたるや!!
この小説を読んでラストにとまどったとしたら、ちょっとフィクションばっかり読んでて、鈍感になってたんじゃない? と言いたい。
三省堂書店有楽町店　新井見枝香さん

とにかく怖い。ホラーや心霊の類よりも、
人の闇が一番怖くて苦手な私にとっては、
忘れたくても忘れない一冊になりました。
この夏一気読みの、最恐、最涼小説!
うつのみや金沢百番街店　小松稚奈さん

“どんでん返し”は物語の中で行われるものだとばかり思っていたが、この作品は違うのだ。
“どんでん返し”が物語の外で行われている”
今までこんな読後感のミステリがあっただろうか。これはぜひ、読んで、体感していただきたい。
成田本店みなと高台店　櫻井美怜さん

“微笑み”といえば普通は肯定的に語られるもの。
それなのにこの本の『微笑む人』というタイトルは、なんと人の心を不安にさせることか。
ノンフィクションの体裁で書かれた物語が、
ようやく真実にたどりついたかと思うとひっくり返されて、
最後まで読み終えてもモヤモヤとした恐れのようなものが残ったままなのだ。
ジュンク堂書店ロフト名古屋店　石本秀一さん

刊行によせて「言霊使いとして」

貫井徳郎

月刊ジェイ・ノベル
2012年9月号より

『微笑む人』は、疑惑の人を巡るミステリーである。疑惑の人とは、犯罪を犯した物的証拠はないが、状況証拠ではどう見ても怪しいという、たまにマスコミを賑わすタイプの人のことだ。つい先頃も、男を何人も殺した疑惑を持たれた女の裁判があったから、読者もイメージしやすいだろう。

この種の疑惑についての報道はいつも、過熱する印象がある。つまりそれだけ、世間の関心が高いということだ。なぜ人は、そんなにも「怪しい人」に興味を惹かれるのか。自分も被害者になっていたかもしれない、というだけならば、交通事故でも火事でも同じはずだ。疑惑の人に心惹かれる理由は、他にあると考えなければならない。

とはいえ当初は、フィクションでそうした興味を満たせればいいと単純に考えていただけだった。ドキュメンタリー形式で、疑惑の人をいろいろな角度から描くことで、読者の野次馬根性を満たす作品。最初の構想はそれ以上のものではなく、特にテーマなども設定していなかった。

だから最終的には、現実では味わえないカタルシスを読者に提供するつもりだった。理解できない犯罪を犯す人にも、そうなる理由があった。その理由を聞けば、むしろ人々は同情するだろう。そんな落ちを作り、最後は満足して本を閉じてもらう。恥ずかしながら、その程度の単純な構想から書き始めたのである。

第四章まで連載で書き進め、いざ最終章に取りかかろうというときに、冒頭から読み返してみた。すると、愕然とすることが書いてあった。疑惑の人の実の父親が、冒頭に登場しているのである。なぜこんなくだりを書いてしまったのか、自分でも理解できなかった。

というのも、構想では実の父は死亡していることになっていたからだ。早くに父を亡くした疑惑の人は、母が再婚した相手に虐待されて心に傷を負った。その当時、ただひとり自分を励ましてくれた女の子の存在だけが心の支えだった。トラウマのせいで後に平気で人を殺せるようになったが、女の子への気持ちは薄れていなかった。わかりやすくも、陳腐なストーリー。その構想に則って、小説を書き始めたはずではなかったのか。

実の父親が登場していては、当初の構想を放棄するしかない。自分の凡ミスに信じられない思いを抱きつつ、締め切りが迫っている状態の中、必死で構想を練り直した。すると、思ってもみなかった異様なストーリーが浮かび上がってきた。当初の構想の陳腐さを鼻で嗤う、しかしかつて誰も書いたことがないストーリー。そこに至ってようやく、物語が本来内包していたテーマを、ぼくは発見したのだった。

もともとぼくは、あまり構想の細部を練らずに書き始めるという、ミステリー作家にあるまじき執筆スタイルの持ち主だった。最初の設定と結末だけを考えて、途中の展開やキャラクター像は白紙のまま着手する。書きながら考えるというより、物語が勝手に膨らんでいくのに任せた方が、いい作品になると経験から学んでいたからだ。

特にそのスタイルは、同時並行で書いていた『新月譚』という作品で極まっていた。『新月譚』はミステリーではない。だから着地点がどこでもよく、物語が走るままに書き継いでいくことができた。一度物語を掴んでしまうと、自分で書いている実感すらなかった。主人公が憑依し、ぼくに書かせているのだと思った。主人公は小説家であり、最終的には今のぼくなど足許にも及ばない大作家に成長していく。そんな存在を描けたのは、書いたのがぼくではなかったからだ。ミステリーから離れることで、言霊の力をまざまざと感じた。

言霊の力を頼りに書くスタイルは、ミステリーと相性が悪い。ミステリーは必ず、狙ったところに着地しなければならないからだ。そのせいでぼくは過去にいくつも、本にできない失敗作を書いてきた。物語が走り出す力を撓め、作者の都合で行く先を誘導すれば、物語は死ぬ。走り出した物語がきちんと狙ったところまで辿り着いてくれるよう、祈る気持ちで小説を書くしかなかった。

二〇〇九年に発表した『後悔と真実の色』という作品でも、やはり失敗してしまった。連載時は、物語を凡庸な地点に強引に落とし込んでしまったのだ。ぼくは失敗を悟り、すぐには本にしなかった。物語には力があるのだから、本来の着地点にぼくが誘導してやらなければならない。それを見つけるまでに一年半かかり、ラスト一五〇枚を書き直すことでようやく出版できた。このときはまだ、自覚的に言霊の力を使えずにいたのである。

『微笑む人』でもまた、同じ弊に陥るところだった。しかし今回は幸運にも、明らかな矛盾があって連載中に構想を練り直すことができた。お蔭で、最初の凡庸な構想より遥かにいい作品になった。矛盾があったことに、かえって感謝したほどである。

だが、物語が中盤に差しかかって当初の設定をうっかり忘れてしまったのならともかく、矛盾は冒頭に存在していたのである。それどころか、疑惑の人に「トラウマはない」とまで断言しているのだ。構想とまるで違うことを、なぜ連載第一回から書いていたのか。自分のミスが不可解でならなかった。

あるとき、卒然と気づいた。『新月譚』は言霊の力を借りて書いた作品であるのに対し、『微笑む人』は自力で書いた作品だと思っていた。それは実は間違いだったのではないか。『微笑む人』もまた、言霊がぼくに書かせた作品だったのだ。

そう考えなければ、冒頭のあからさまな矛盾の存在が説明できない。言い訳をすると、これでも一応十九年間も小説を書いてきた身だから、書き方くらいはわかっている。こんな凡ミスは、かつて犯したことがない。そのぼくが矛盾した話を書いてしまったのは、それが本来の物語だったからではないのか。ぼくの受信能力が乏しいせいで物語は矮小な形で世に出てしまうところだったが、本来の力は作者の貧弱な構想などぶち壊すほどだった。だからぼくは構想に逆らったことを書き、それが布石となって最後には正しい結末に至れた。ほとんど神秘体験のようだが、これは実際に起きたことである。

『後悔と真実の色』を書いたときには、まだ連載中に修正する力がなかった。書き直したとはいっても、冒頭から全面的に改めたわけではない。最後の一五〇枚を書き直すだけで、無意味に書いていたエピソードが伏線に変わり、全体の意味ががらりと変わったのだ。これはやはり、ぼくの受信能力に問題があったためだと言うしかない。

そのときに比べれば、『微笑む人』は連載中に修正できたのだから、言霊使いとしては多少進歩したのだろう。ぼくが誇れるとしたら、その点だけだ。

『微笑む人』は当初の凡庸な構想を大きく越え、異様な真実の姿を現した。その結末には、ぼく自身が驚いた。作者が驚くくらいだから、読者も当然驚くだろう。人によっては、唖然としすぎてただ戸惑うかもしれない。それほどに、既存のミステリーとはまるで似ていないのだ。

小説技巧上のサプライズはある。たいていの人は、そこで驚くはずだ。だがこの物語の真の驚きは、読者がいかに思い込みでミステリーを読んでいたか気づく瞬間にこそ生じる。読者が無意識に抱いてしまう、物語への期待。それを『微笑む人』は粉々に打ち砕くだろうことを、単に言霊を受信したに過ぎない作者はここに約束する。